



道中だより

第 389 号

令和 7 年 1 月 23 日発行

- 巻 頭 言
- 全 日 中 大 会 報 告
- 論 文
- さ り な が ら
- 後 期 情 報
- 事 務 局 日 誌



「夕陽に輝くオホーツクの流氷」 湧別町立上湧別中学校 綾 部 雅 一



目指すのは「全ての子どもたちへの より良い教育の実現」

北海道中学校長会 副会長 柴 田 真 琴

新春を迎え、会員の皆様におかれましてはますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

各地区の会員の皆様には、9月の北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会への参加をはじめ、10月の全日本中学校長会研究協議会岩手大会での研究発表等に御協力いただき、所期の目的を達成することができました。また、各種事業についても計画通り推進することができました。心より感謝申し上げます。

さて、令和5年に教育振興基本計画が閣議決定され、その後も教育をめぐる施策が次々と示されております。北海道においても「北海道教育推進計画」により『自立』と『共生』の理念を実現するため、3つの施策の柱と22の施策項目を設定し、個別・具体的取組を推進しています。

そのような折、昨年9月、文部科学省から「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」による論点整理が公表されました。

論点整理はこれから教育課程の改善の検討を行っていく際の基礎的な資料として活用されることを期待するものではありませんが、今後の教育改革の基盤となる重要な指針であり、教育現場における具体的な取組の方向性を

示しております。特徴的なものとしては、教育課程の特例制度や単位授業時間の取り扱いなど教育課程編成に係る裁量拡大が示されており、多様な個性や特性、背景を有する子どもたちを包摂する柔軟な教育課程について言及されているところです。

国や北海道の動向を踏まえ、各学校では学校評価等をもとに自校の課題と向き合い、次年度に向けて持続可能で生徒の実態に即した教育活動を推進するとともに、生徒一人一人のウェルビーイングと生徒自らの可能性を最大限に引き出せるよう充実した学校経営方針の策定を進めていることと思います。

道中においても各地区校長会や関係機関等と連携を密にし、会員の皆様と意思を一つにしなが堅実に道内中学校教育の振興と校長としての職能の向上のため諸計画を引き続き推進するとともに、今年度の成果と課題を踏まえ、全ての子どもたちへのより良い教育の実現に向けた令和7年度の運営方針について検討してまいります。

結びになりますが、新しい年を迎え、会員の皆様の御健康と御多幸を御祈念申し上げるとともに、今後の道中の活動に対しまして皆様の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

第 75 回全日本中学校長会研究協議会 岩手大会

～未来への一步を 共に、 黄金の國いわてから～



第 75 回全日本中学校長会研究協議会岩手大会は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」を研究大会主題とし、全国各地から 1,700 人を超える会員が参加し、トーサイクラシックホール岩手を主会場に開催された。3 日間の日程と主な内容について報告する。

◆日程

【第 1 日 10 月 16 日(水)】

- 13:00～13:50 全日中常任理事会
- 14:15～17:00 全日中理事会
- 13:30～14:30 全体協議会運営委員会
- 15:00～17:00 分科会運営委員会
- 18:00～20:00 レセプション

【第 2 日 10 月 17 日(木)】

- 9:30～10:20 開会式
- 10:30～11:20 文部科学省説明
- 11:25～12:20 全体協議会
- 14:00～17:00 分科会

【第 3 日 10 月 18 日(金)】

- 9:00～9:30 アトラクション
- 9:40～9:55 全体会
- 10:00～11:30 記念講演
- 11:35～12:00 閉会式

◆文部科学省説明

「当面する初等中等教育上の諸課題及び質問事項」

文部科学省 初等中等教育局 主任視学官
田村 学 氏



私たちは日々の学校や授業、教育活動のイメージをもっていますが、そのイメージの多くが経験

に基づくものだとすると、それは少し古いものになっているかもしれません。もちろん、古いものにも価値があると思いますが、新しい時代がやってくるこの社会において、まずは発想の転換が必要だということになると思います。トップリーダーの校長先生方が学校経営をするにあたり、あるいは地域の教育を確かなものにしていくにあたり、御自身の発想を大きく変えていかねばなりません。その一つは、教育は教師中心であったという考え方から、学び手の子供を中心にしていこうという考え方に立つことだと思います。なぜかと言えば、授業においては先生が頑張った、それは大事なところですが、本当に重要なのは、学び手の子供たちが本気で真剣に学びに向かうことこそが、実

際の社会で活用できる力を付けていくということだと思います。

そんな中で、教育課程の基準の改定が行われ、現在の学習指導要領が展開しています。皆さん御存知のように、何ができるようになるかといった実際の社会で活用できる力を付けていくために、何を学ぶかも重要だが、むしろどのように学ぶかが重要になっています。そして、ここに主体的・対話的で深い学びというキーワードが出てきたということになるわけです。この3つの資質・能力の育成に向けて、現在、日本全国の多くの学校や多くの先生方が御努力され、そのトップリーダーの皆さんがここにいらっしゃるということだと思います。日本全国の中学校の新たな教育が、確かな形で推進できるかどうかは、まさに皆さん一人一人の言葉や振る舞いに私がかかっているのではないかと思います。今日、明日の研究協議を通して、確かな力を付け、また地元に帰って御発信いただければと思います。

中学校の授業はまさに新しい授業改善を行い、確かな形で展開されてまいりました。しかし、この主体的・対話的な深い学びを実現する最中に、新型コロナウイルス感染症の拡大があったために、正直申し上げると、熱心な授業改善を継続していたところ、残念ながら若干停滞したところがあったように思いますが、現在の状況の中で新たな学びを確かに推進していくことが求められていると思います。そんな中で、新しい学びの重要な鍵となる理念は、学習する子供の視点に立つと捉えていただくと良いと思います。先ほど申し上げた発想の転換ということになるわけです。

そんな中、昨年6月、福井県の高等学校で授業を参観しました。私がこれまで見てきた高等学校の授業では、特段に優れている授業だと思いました。どんな授業かというと、若い先生とベテランの先生による横断的で探究的な授業で、敦賀港に昔からある有名な昆布だし店の昆布のテイスティングから始まります。子供たちは二つを見比べます。1個は味が強く、香りもはっきりしていて色が濃いものです。もう1個は正反対のものです。どうしても子供たちは味が強く色が濃いものを老舗の味と選びますが、結果的には全く正反対です。実はこれは科学、アミノ酸の世界の話になります。そして、それを実験しながら確かめていきます。旨味といった日本文化の話が、まさに今度は、社会科学の世界から自然科学の世界に展開し、最終的にはこの敦賀の地にこうい

った昆布だし店が生まれた地理的な背景を考えるとこの学びになっていました。そして、どうして敦賀に昆布だし店ができたか、それは当然、あの北前船で敦賀港に昆布が届きます。本当は京都に届けたかったのですが、山があって届けにくく、とりわけ冬は雪が降ってどうにも届けられなかったために、貯蔵が始まるわけです。そして、結果的にこれが発酵を生み、このような昆布だし店が生まれたわけです。

この授業は学びが豊かで実り多くて楽しく、高校生がいい表情をしていました。私はこの高校の授業を見たときに、高校の先生の授業がチョーク&トークから変わったのを嬉しいと思ったもう一方で、こういった授業が高校で展開されたら、大変ピンチだと思いました。すぐに頭によぎったのは、これは中学校の授業は頑張らなければならないと思いました。もちろん小学校もそうです。何となく高校の授業は教え込みのイメージあるのではないかと思います。実際、このように変わってきているのです。

そうであるとならば、中学校の授業も豊かなインタラクティブなディスカッション、あるいはそこにICTを生かしたGIGAスクール構想の授業が皆さんの学校で実現されているか、あるいは地域で実現されているかといったことが問われてきます。今回の指導要領は、こういった資質・能力の育成に向けた授業改善をしていくことを目指して展開されています。国が示しているキーワードを関係的に捉えるならば、目指す資質・能力は3つあり、そのためには生徒に主体的・対話的で深い学びをしてほしいということになります。生徒が主体的・対話的で深い学びをするには両輪が必要であって、一つが授業改善、一つがカリキュラム・マネジメントと捉えていただくと、主要なキーワードは関係的・構造的に見えてくると思います。重要なことは、国の説明をただ暗記するだけではなく、御自身の中で咀嚼していただき、確かな意味理解につなげるということです。

主体的・対話的で深い学びはまさに授業で実現していただいているわけですが、主体や対話は明記しやすいが、深い学びはイメージしにくいという話を聞きます。この主体的・対話的で深い学びを理解する一つとして、主体的・対話的で深い学びを英語に訳すとどんな言葉が当てはまるかを考えてみると良いと思います。文部科学省では、オーセンティック(authentic)と訳しています。そのまま日本語に訳せば真正な、少し言い方を変えると正真正銘、もう少し日常の言葉に落とし込むならば、より子供たち

学力・学習状況調査の関係で見てみます。ICT の利活用については、全国的には増えている状況です。利活用の時間が増えていることはとても好ましいことではありますが、そうではない学校もあるわけですから、そういった学校は利活用について進めていこうということになると思います。しかし、この利活用が大きくなれば単純に学力が上がるというものでは現在ないようです。そっくり相関が出るわけではないですが、重要な問題は、どのような利活用と主体的・対話的で深い学びを行っているかという両者が掛け合わさったときに成果が出ているということです。つまり利活用を増やすとともに、ここで主体的・対話的で深い学びの授業改善をしている学校は、好ましい結果が出ています。まさに ICT の利活用とその場における主体的・対話的で深い学び、これを熱心にやっている学校とそうでない学校は大きな差が出てくるということです。簡単に申し上げれば、子供たち一人一人の資質・能力の育成に向けて、トップリーダーの校長先生方がどのようにお考えになり、どのように推進していただくかということだと思います。まさに、主体的・対話的で深い学びを進めてきたところに GIGA スクールが入ってきたということです。当初は ICT の利活用に対する若干の不慣れな部分があったかもしれませんが、しかし、一定の時間が経ってきたことによってそういったことが徐々に解消されてきている中で、更なる推進をぜひお願いしたいと思います。さらに申し上げますと、この ICT の利活用については、大変子供たちの好意的な反応があります。例えば、自分のペースでできるとかすぐ調べられるとか、あるいは、楽しんでやれるとか、とってもよくわかると子供たちは言っています。あるいは、伝えやすい、調べたりもできると子供たちの反応の良さが出ています。学習に対するとっても好ましい子供たちの意識だと思います。そこを積極的に活用していただくことは、当然、学校の教育活動の充実につながるということでもありますし、この ICT の利活用の効力と言っても良いと思いますが、自己有用感や幸福感が高いというデータも出ているわけです。さらに申し上げますと、家庭環境が好ましくない状況にある子供たちにおいて、実は極めて効果的に結果が出ています。そうすると、御自身の学校の様々な地域や家庭の環境などを視野に入れていただきながら、この結果が高く出るというところうまく活用いただくことが、皆さんの学校経営にダイレクトにつながってくるということではないかと思

ます。GIGA スクール構想に関しても、更に大きな予算を付けて進めていくという展開でありますので、ぜひ利活用していただき、御自身の学校経営を豊かに、一人一人の子供たちが確かな力を付けるようなものに進めていただければと申し上げたいと思います。

さて、ここで令和の日本型学校教育について確認をし、皆さんと共有をしていきたいと思います。今回の学習指導要領で出てきた主体的・対話的で深い学び、あるいは、令和答申で示された個別最適な学びと協働的な学びを一体的に行う、この両者はどちらも資質・能力の育成という点においては変わることのないものと考えていただくと良いと思います。主体的・対話的で深い学びはどちらかというと、能動的な学習、いわゆるアクティブラーニングという言葉が当てはまります。ここに、一人一台端末を用意し一人一人の子供たちが確かな学びを実現できるようにしていこう、これが個別最適な学びと協働的な学びとなります。したがって、これまで同様、資質・能力の育成に向けて能動的な学習は継続しながらも、子供たち一人一人により丁寧に目を向けていこうというのが、まさにこの令和答申から出てきた個別最適な学びと協働的な学びの一体化ということになると思います。ここに指導の個別化、学習の個性化という言葉が出ており、おそらく皆さんも日々お聞きになり、授業改善をされていると思います。確認するならば、知識、技能、思考、判断、表現、学びに向かう力、人間性をより確かに一体的に育成することは変わらず、そのために、個別最適な学びと協働的な学びが一体的に充実することによって、主体的・対話的で深い学びを実現していこうということです。深い学びを実現するためにはどうすれば良いか、それは、学習指導要領総則第 3 章第 3 節に書いてある「活用」すること、言い換えれば、いかにアウトプットするか、いかに音声言語と文字言語を使うかです。さらに言うならば、授業における「話す」や「書く」を潤沢かつ質高くやるか、ここが重要になってきています。そうすると、皆さんの学校の授業で「話す」や「書く」がどれぐらい十分に行われているか、これが大きな鍵を握るということになります。アウトプットについて中学生に聞くと、やはりアウトプットは楽しいと言います。しかし、私が知っている中学校 3 年生に聞くと、インプットも欲しいとはっきりと言いました。先生からわかりやすい知識を確実に丁寧に教えてほしいということです。つまり、子供たちは多くの先生方を信頼

しているんだと思います。アウトプットの方が楽しい、でも、インプットも必要ということです。授業における先生方の丁寧な説明や知識の伝授は必要だと思いますが、ただ、いかにスリムでシャープでコンパクトに、スマートに語れるかが問われています。そして、それをアウトプットすると、頭の中の知識はどんどんつながりネットワーク化していき、長期にわたって保持される、これが、記憶ということです。我々はこれまで子供たちに多くの知識を獲得してほしいと願って繰り返し反復の学習を行ってきました。しかしながら、繰り返し反復しか知らない先生とアウトプットすることによって知識がしっかり残っていくということを知っている先生では、授業改善の幅が全然違うということになってきます。そして、ここにデジタル学習基盤がかなり深く関係しているということになります。

デジタル学習基盤においては、インプットは大量で多様な情報を高速で手に入れることが可能になり、処理過程においては、デジタルデータは可視化され、操作がしやすいので、関連付けということが生まれやすくなります。さらに言うならば、アウトプットではその蓄積や検索、さらにキーボード入力において、おそらく同一時間における文字数は圧倒的に増える可能性があります。そうなったときに、このアウトプットの長めの文字言語はかなり学力に大きく影響してきます。しっかりとした振り返りを行えているかどうか、単なる文を書く作業になっていないか、こういったことを考えていただくと、深い学びに結びつく可能性が高まるということがわかってくるのではないのでしょうか。ICT の利活用は、将来の社会の変化といったことを考えると、子供たちには欠かせない必須の要素ということももちろんありますが、期待する資質・能力の育成、あるいは深い学びの実現に大きな可能性があることも視野に入れていただくことで、より学校での教室の授業が変わっていくのではないかと思います。

そこで今度は、個別最適な学びと協働的な学びを見ていきましょう。例えば、音楽の鑑賞等でデジタル学習基盤を活用することで、一人一台端末は一人一人が聞けますから、場面を選んだり繰り返し聞いたり、速度を変えたりしていろいろな聞き方ができます。そして、それを協働的に学んでいくことができますとより充実した学びが展開できます。また、自由進度学習へのチャレンジも可能です。最初に子供たちが全体の計画を確認しつつ、どんどん進めてい

こうとか、違う学び方を選択してみようということを考えながら学習を展開することができ、ICT の利活用だからこそ考えられることではないかと思います。しかしながら、ここで配慮し気をつけたいことは、このような状況にある子供たちが端末を持っていることで、一人一人に質の高い学習が実現できているのではないかと勘違いしてしまうことです。本当に一人一人に対する深い学びが実現できているかどうか、ここは十分な配慮が必要になります。どんどん進んでいく子供もいるが、そうではない子供たちへの目配せが必要だと思います。子供たちが本当に期待する深い学びに達しているかに十分な配慮をしながら、それぞれの授業を確かなものに改善していただきたいと思います。ICT を使うことによって豊かな学びがどんどん形成されていく大いなる可能性があるわけですが、それはただ単に端末を持たせておけば良いという話ではなく、これまで皆さんが重ねて培ってきた先生方の教師としての力量を発揮する必要がありますということです。授業を導入・展開・終末に分けるならば、展開で個別に分かれるシーンがあるならば、その前には導入があり、おそらく終末がこの展開次第で若干個別になったとしても、導入は一斉だと思います。それぞれの場面で適正な教師の指導が位置づけられているのが大切だと言うことです。簡単に子供に委ねる・任せるという言葉だけで解決せず、一体何をどれくらいということを視野に入れながら、より確かな指導性を発揮していくということが、単元展開のイメージにもつながるのではないかと思います。

さて、不登校児童生徒が大変多くなっているような状況もあります。これにつきましては、やはり子供たちにとって安心できる場所があるか、学校という学びの場が彼らにとって楽しく思える場であるのかということが、最初の大きな条件になってくると思います。学校の教育活動の重要な大部分を授業が占めているならば、どのような授業をつくっていくかということにもつながってくるのではないのでしょうか。まずは、子供たちの安心安全な場所といったものが重要になってきますが、その重要な部分には授業までの様々な教育活動があり、それぞれの学校の状況に合わせながら、取組を進めていただければと思います。

続いて、次の学習指導要領における教育課程の基準の改定についてお話しします。前回の改訂に合わせるならば、ここから 3 年間ぐらいで指導要領の改

訂告示という形になりますので、今年度または来年度にそういったことが生じるかもしれません。そこに向けて、文部科学省では、有識者会議の論点整理を令和 6 年 9 月 18 日に公表したところであります。詳細はサイトでご覧いただければと思いますが、これから求められる資質・能力、あるいはその資質・能力をどのような学習指導要領上の表現にしていくなかといった規定の話などが示されています。有識者会議の中で出てきた論点ということになりますので、これを全て指導要領に反映するかどうかは今後の議論ということになるかもしれませんが、多様な子供たちを養成する柔軟な教育課程を実現できるように、校長先生方のトップリーダーに力を発揮させ、方向性を考えてはどうかという議論もあったということを御紹介させていただきます。

最後に、カリキュラム・マネジメントの話をしていただきます。各学校のトップリーダーの校長先生方はどのような授業改善や校内研修をしていくのか、さらには、御自身の学校をどのような学校にするためにどういった教育課程を編成し、どのような独自性を出していくのか、熱心に知恵を働かせ工夫をされているのではないのでしょうか。カリキュラム・マネジメントについては御存知の三つの側面、すなわち「内容の組織的配列」「PDCA サイクル」「リソースの活用」があります。これまでは PDCA サイクルの部分を多く取り組んできましたが、そこに内容の組織的配列やリソースの活用も取り組もう、加えて、トップリーダーの校長先生はもちろん、先生方と一体となってカリキュラム・マネジメントを進めていこうということです。そう考えると、カリキュラム・マネジメントは対象の幅が広いということです。例えば、地域との連携や校内の時間割、教職員の様々な授業の配当もあるかもしれません。そういったことを勘案すると幅広くなってくるわけですが、その中でも特に内容の組織的配列に着眼をしていたいてはどうかと思います。つまり内容というのは、指導要領の内容になります。これをいかに意図的・計画的・組織的に配列するか、カリキュラムをどのようにデザインするか、それが教育課程の編成ということになってくると思います。御自身の学校の教育課程が子供たちや地域にふさわしいことになっているか、こういったことをお考えいただくと良いのではないのでしょうか。これまでカリキュラム・マネジメントについて多くの研究者が語っていますが、静岡文化芸術大学の倉本先生は、その中心には教育

課程の編成があり、その周りに校内組織の管理運営があり、更にその組織に学校内外の連携といったものがあると話されています。皆さんが日々トップリーダーとして、いかにそこに意識を向け、校内組織を確立し、地域と連携し、確かなものとして実施していくかということが大切ではないか思います。

学指導要領「総則」の第 3 章第 2 節に教育課程の編成がございます。ここに書かれていることは、各学校の教育目標と教育課程との関係を示しており、総合的な学習の時間と関連付けると言っています。簡単に申し上げると、教育課程の編成における縦の部分となる教育目標をいかに授業まで落とし込んでくるかということ、そしてそこにどう教科を横断させていくかということなると思います。皆さんがそれぞれの学校で縦横を丁寧に編み込んでカリキュラムをデザインし、教育課程の実現に向けて取り組んでいただくことで、日々の授業から確かな目標が実現されるということです。このカリキュラム・マネジメントの三つの側面である「内容の組織的配列」に着手し取り組むことは、多くの先生方にとって、御自身に関する重要な事柄となります。なぜかと言えば、日々の授業は誰もが実施する目の前にある大事なことからです。そして、このことに多くの方が挑戦することが、PDCA サイクルにつながっていくということになります。皆さんの学校はどういった状況で、どんな教職員の皆さんがいて、どんな学校の伝統文化があるのかをお考えになった上で、トップリーダーとしての戦略を立てていかれば良いと思います。

この度、この岩手の地に全国のまさに中核となる校長先生方が集まって御議論を交わすということは、そういったことに向けて意見交換をし、新たな知見をおもちになっただき、それぞれの学校や地域にお帰りになっただきという格好の機会ではないかと思います。御自身の学校の教育活動を思い出し振り返っていただきながら、今日と明日の協議会を充実したものにしていただけることを願っております。皆さんのお考えや取組が、多くの先生方の新しい働き方につながっていくことでしょうし、そのことが、子供たちの豊かな学びにつながっていくことだと思います。御自身の御健康には十分注意していただき、必要なところから力を注いでいただくことをお願い申し上げまして、文部科学省からの説明とさせていただきます。

◆全体協議会

■第 1 研究協議題 全日中提案

学校からの教育改革 ～「ウェルビーイング」を高めるこれからの中学校教育～

全日本中学校長会総務部長 清野 正

平成 18 年に全面改正された教育基本法に基づき、政府が策定する教育に関する総合計画である第 4 期教育振興基本計画が令和 5 年 6 月に閣議決定された。この基本計画は令和 9 年度までの国の教育政策全体の方向性や目標、施策などを定めており、将来の予測が困難な時代において、進むべき方向性を示す教育の羅針盤となるものであると位置づけられている。基本計画の総括的な基本方針・コンセプトである「2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」に焦点を当て、全日本中学校長会が実施した近年の各種調査や国が実施した教員勤務実態調査等から、ウェルビーイングに関する中学校教育の現状等を分析・考察し、その課題と今後の目指すべき方向性等が提言された。

(1)令和 4・5 年度調査結果から読み取れる課題

＊令和 5 年度調査研究報告書（全日本中学校長会）

教育研究部調査及び生徒指導部調査

＊令和 5 年度全国学力・学習調査 質問紙調査

＊令和 4 年度文部科学省教員勤務実態調査

①ウェルビーイングを向上させる教育活動において、

「学校図書館、地域の公共施設の利活用」と「外国語教育」について、順調に実施できている学校の割合が低く、取組内容も少ない。

②中学生の特徴的な心の変化の表れとして「人間関係づくりが苦手」が 82%にのぼっている。

③「将来の夢や目標を持っているか」の質問紙の問に対して、他の問に比べて肯定的な回答の割合が低く、経年でも下降傾向が見られる。

④主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びが、生徒の自己有用感等に影響を与えている可能性がある。

⑤教員の業務について、事務や地域対応の業務等については、相対的に負担感が高く、重要度が低い。

⑥個別打ち合わせに対する負担感は低く、重要度が高い。職員会議など全体打ち合わせの実施方法を効率化することにより、会議全般に対する負担感を軽減できると思われる。

(2)提言

①心理的安全性の高い学級づくり及び生徒の学び方やペースを活かした学習指導の工夫

これまで行ってきた中学校教育はウェルビーイングの向上にも十分資するものである一方、社会の変化は我々の想像を超えて劇的に加速しており、「生徒を認める指導」や「主体的・対話的で深い学び」の充実を図り、生徒の自己有用感等を高めていくため、心理的安全性の高い学級づくりや生徒の学び方やペースを活かした学習指導の工夫などの取組を具現化するべきである。

②教職員の様々な意見を積極的に活かすなど多様な人材が力を発揮できる学校づくり

職場の心理的安全性を高め、教職員が意見を述べる事ができ、新たな試みに挑戦できる風土を構築するとともに、多様な人材が力を発揮できる学校づくりを推進するため、教員に裁量を与え、教員の「エージェンシー（振り返りながら責任ある行動をとる能力）」や「エンゲージメント（思い入れ）」、「働きがい」を向上させなければならない。

③地域の教育資源を活用したカリキュラム・マネジメントの一層の充実

基本計画では、子供たち一人一人が幸福や生きがいを感じられる学びを保護者や地域の人々とともにつくっていくことで、学校に携わる人々のウェルビーイングが高まり、更には世代を超えて循環していくという在り方が求められるとしている。そのために、働き方改革の推進にも留意しながら、地域の教育資源を活用したカリキュラム・マネジメントの一層の充実やコミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進、部活動の地域展開などにより、家庭・地域、社会全体のウェルビーイング向上に貢献していきたい。

■第 2 研究協議題 近畿地区提案

明確なビジョンのもと、活力ある組織・運営体制を築くための校長の在り方

香川県土庄町立豊島中学校長 池田 憲生

岡山県と香川県の間にある瀬戸内海に浮かぶ島にある同一校舎小中併設校という環境を踏まえ、教育目標「ふるさと豊島を誇りに思い、たくましく生きる力をもった児童・生徒の育成」を掲げ、教育活動に取り組んでいる。この教育目標は、将来子供たちが小さな豊島から社会に出たときに、自分の考えをしっかりともち、正しく判断できるように、そして、子供たちが島を離れる、島に戻る、どちらを選択しても常にふるさと豊島のことを思い、大切にできる児童生徒を育てることを学校の使命と考え設定しており、この教育目標に基づいた学校経営の実践につ

いて提言した。

(1)主な実践活動

①主体的に自分の良さを見出し、ふるさと豊島を愛し、誇りに思う子供づくり

ア 豊島を学習教材にして学ぶテーマ学習

イ 豊島の豊かな自然の中で体験活動を行い学ぶ勤労生産学習

②豊島の子供たちのためにやりがいをもって働くことができる「チーム豊島」づくり

ア 他教員と協働して進められる組織体制づくり

イ 中学校教員指導時数の削減

③ともに豊島の子供たちを育てていく保護者や地域との関係づくり

ア 主体的な PTA 活動を目指した取組

イ 地域コミュニティの核となる学校への取組

(2)実践の成果と課題

これまでの慣例行事を繰り返す教職員に、活動のねらいや保護者、地域とのつながりなどを考え実施するように指導し、また、各担当業務が教育目標の何につながり、他とどう関係するか示すことで、教職員が少しずつ目的意識を持って取り組めるようになってきた。しかし、小中教職員の協働活動については、放課後の部活動指導等、小中教員間での時間調整が難しく、「チーム豊島」の推進にはまだまだ工夫が必要である。また、地域の高齢化、過疎化の影響により、家庭や地域の様子が少しずつ変容してきている中、これから学校が地域コミュニティの核として、どのような役割を担っていくか考えていかなければならない。

◆分科会

8つの分科会に分かれ、それぞれの担当地区から研究の取組と成果・課題について提案があり、熱心な研究協議が行われた。

第6分科会：北海道地区

〈自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実〉

・地区校長の連携による組織的な取組の推進

旭川市立神居東中学校長 坂東 裕美

旭川市中学校長会では、旭川市における中学校教育の意義とその役割の重要性を深く認識し、旭川市の実態に立脚した「信頼される中学校教育の創造」に向けて取組を推進している。具体的には、全市的な視点に立って、いじめ防止教育の推進や教職員の意識改革と指導力の向上に向け、①中学校長会議・

研修会におけるいじめ対応等に関わる継続的な研修の実施や「いじめ対策プロジェクト協議会」による情報収集や各校長への情報提供を通じた、校長としての資質向上を図る取組の充実、②いじめ防止教育の推進を目指した「生活・学習 Act サミット」における代表生徒の協議の場の設定や、「旭川市いじめ防止対策推進条例」について生徒が学ぶ機会の設定、③教職員対象のアンケート調査の実施や生徒指導担当者が参加する会議での情報提供、ミドルリーダー向け講話を通じた教職員の指導力向上に向けた取組を推進している。成果として、①いじめ認知件数の大幅な増加、②全中学校において定例の学校いじめ対策組織会議の月1回以上の開催、③教職員のいじめ対応に必要な知識理解の深化、④生徒のいじめを許さない意識の醸成等、多くのことが得られている。



・子供たちのウェルビーイング向上の実現を目指す校長のマネジメント

留萌市立港南中学校長 田谷 典久

留萌管内小中学校長会では、研究主題を「持続可能な未来社会の創り手を育て、ウェルビーイングの向上を目指す留萌の小中学校づくり」とし、その中でも、学校内外の連携・協働に基づく「チームとしての学校」を実現した生徒指導体制の構築に重点をあて、取組を進めている。具体的には、①ピア・サポート活動の導入やロイロノートの利活用等による、学びの基盤をつくり自己指導能力の育成を目指した学校運営の推進、②統合を契機として校則の見直しを図り、生徒の主体性を高め、家庭・地域との連携を深める学校運営の推進、③関係機関との連携・協働による組織的な不登校対応の推進を行い、各学校の実情に合わせた取組を進めてきた。成果として、①経営方針の浸透が協力へとつながり、生徒への多面的かつ効果的な支援を行うことができるようになった、②役割分担を明確にして外部と連携すること

で、教職員の負担軽減や効果的な生徒支援にもつながり、働き方改革と生徒指導の充実の両立を図ることができた。

分科会の最後に、全日中を代表して道中 河村会長から旭川市中学校会・留萌管内小中学校長会の提言発表とその後の各グループでの研究討議の様子を踏まえた振り返りと助言が行われ、参加者全員が確かな成果を実感し分科会を終えた。



なお、坂東、田谷、両氏の提案の詳細については会誌「全道中」No.94 号（令和 7 年 3 月 1 日発行予定）に掲載する予定である。

他の分科会の研究協議題と概要は次のとおりである。

第 1 分科会：四国地区

〈「カリキュラム・マネジメント」の推進〉

学校教育目標の実現に向けた「学校と地域が連携した教育課程」の実践事例、コミスクを核とした人財育成の実践状況が発表された。

第 2 分科会：東海北陸地区

〈「主体的・対話的で深い学び」の実現〉

主体的に考え、伝え合って学びを深められる生徒の育成に向けた実践事例、ICT の利活用や「対話的な活動」等を通した授業改善の実践事例が発表された。



第 3 分科会：東北地区

〈よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実〉

地域の伝統や人材を生かした道德教育や命を大切にする心を育む道德教育の推進についての実践事例が発表された。

第 4 分科会：関東甲信越地区

〈健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実〉

生徒の健康・体力に関わる課題への取組と地区中学校長会との連携の事例、資質・能力の育成と一層の体力の向上を目指した地区教育委員会との連携の事例が発表された。

第 5 分科会：中国地区

〈社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実〉

キャリア教育を視点とした「学校・地域連携カリキュラム」の効果的な活用事例、小中高等学校・町行政・地域が一体となって進めるキャリア教育の事例が発表された。

第 7 分科会：近畿地区

〈「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成〉

OJT 型研修を生かした日常的な資質能力の向上を目指す校長の取組事例、教員の専門性と ICT 活用指導力を高めるための取組の事例が発表された。

第 8 分科会：九州地区

〈学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現〉

教職員や多様な人材の専門性を活用した組織力を高めるための事例、義務教育学校の特性を生かした地域とともに子供たちを育てる学校の取組の事例が発表された。



◆アトラクション 「合唱」

矢巾町立矢巾北中学校 特設合唱部

矢巾町立矢巾北中学校特設合唱部は平成 20 年度に創部、最初に女性チーム、数年後に男性チーム、最後に混声チームを設立した。各種大会に参加し、全日本合唱コンクールでは女性チームが 6 回全国大会に出場、声楽アンサンブルコンテストでは、毎年全国大会に出場し、3 年連続金賞を受賞している。「魂を揺さぶる表現活動」を目指しながら、「謙虚」「誠実」「真心」の 3 つを目標に掲げ、地区のイベント出演や老人福祉施設への訪問などを行い、日々頑張っている。



耳だけでなく目にも華やかに映る演奏・合唱が披露され、「元気」「勇気」「笑顔」、そして「感動」に場内からは盛大な拍手が送られた。



◆全大会 大会宣言決議



◆記念講演 演題「黄金の國いわて発 銀河系經由ブラックホールへの旅」

講師 国立天文台水沢 VLBI 観測所所長
本間 希樹 氏

本間氏は、アメリカ合衆国テキサス州で生まれ、その後、神奈川県横浜市で育つ。東京大学理学部天文学科を卒業後、同大学院に進学し、博士（理学）の学位を取得。



1994 年より国立天文台 COE 研究員となり、その後、助教、准教授を経て 2015 年から現在まで、国立天文台教授を務める。併せて、2015 年より水沢 VLBI 観測所所長を兼務し、同観測所の運営にあたっている。専門は電波天文学で、特に超長基線電波干渉計（VLBI）の高い視力を生かして銀河系構造を明らかにする VERA プロジェクトで研究推進の中心的役割を果たし、また、ブラックホールの撮影に成功した国際プロジェクト・EHT では、日本側研究者の代表を務めた。

御自身も教育に関わる「教員」という同じ視点から、現代日本の課題である「理数教育」について、天文学や科学技術の立場から見た中学校教育の重要性について講演された。「自分に関係ないと思っていたことが、実は自分に深いつながりがある」ということに気付き意識できるようになり、今後の学校経営の在り方を考える上で大いに示唆に富む内容であった。

◆閉会式

青海大会長、小野寺実行委員長が今大会を振り返り、成果を確認するとともに、それを明日からの学校経営の確実な前進に結びつけていくことを呼びかけた。

最後に、次年度開催となる香川県より、その自然、歴史、産業を背景とする風土の紹介と大会準備の進捗状況等を含めた次大会を大いに期待できる挨拶があり、全ての日程が終了した。

論 文

学びの基盤づくりと ICT 活用による
「主体的・対話的で深い学び」の実現

遠別町立遠別中学校 木 藤 健 史

1 はじめに

遠別町は留萌管内の北部にあり、稚内市と留萌市の中間くらいに位置しており、農業と漁業の一次産業が栄え、もち米や酪農、ホタテの稚貝やヒラメの養殖などを中心に行っている。町内の学校数は、小学校 1 校、中学校は平成元年に歌越中学校が統合し 1 校、遠別農業高校 1 校である。また、ICT 機器を早くから導入しており、平成 28 年には、総務省 ICT 利活用の公開授業を行っている。生徒 1 人 1 台のタブレット活用は定着して、すでに 5 年以上となる。

2 現状と課題

本校の教職員は、初任段階層が 70%の若い構成メンバーで活気に満ちた職員室になっている。その一方で、経験不足からくる生徒との人間関係づくりや生徒指導、授業づくりなど、苦慮している場面も見受けられる。とりわけ、授業づくりには根拠の弱さや教材の選定、1 時間の流れの振り返りなど具体的な問題点もある。そこで教頭とミドルリーダーを含めて課題を洗い出し、授業力向上を 1 年間の学校経営の重点として取り組んだ。

3 取組の視点

グローバル化する社会の持続的発展に向けて学び続ける人材の育成を目指し「授業改善」「指導力、授業力向上」「生徒理解」の 3 点を進めていく。

4 具体的実践内容

(1) 生徒指導の機能を活かした信頼関係と授業づくり

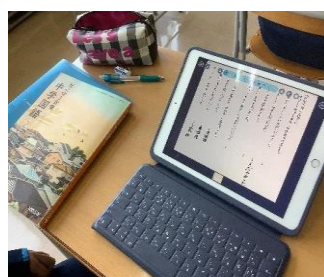
授業づくりの基本として教師と生徒、生徒同士の信頼関係や、一人一人の心理的安全性が確保される必要がある。そのために、ピア・サポート活動を行って学びの基盤づくりとした。取組の主導として研究担当（ピア・サポート推進担当）を中心に行うとともに、学校生活への適応やより良い人間関係の形

成に向けた「ソーシャル・スキルトレーニング」を実施した。

(2) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた 1 人 1 台タブレットの日常的な活用

① タブレットの積極的な活用

・全教科による双方向アプリ：ロイロノートを活用した授業



毎日タブレットを持ち帰り、授業の振り返り、さらに学びを深めるために必要な情報を集めまとめていく。そこから主体的・対話的で深い学びの基盤づくりへ展開していく。

② 欠席をした生徒へのオンライン授業

生徒の体調に配慮しながら、生徒の学ぶ意欲を継続し、学習に対する不安感の解消を図る。

③ 研究授業とオンラインサポートの活用

留萌管内の各教科の研究会と連携を取りながら初任者層の研究授業を（国語・社会・外国語・音楽）行った。また、留萌教育局義務教育指導班と連携してオンラインサポートを受け入れられる体制を整え、各教科で授業力向上を図っている。

5 おわりに（成果・課題）

学校評価の生徒・保護者アンケートで「授業が分かりやすい」が 84.5%（目標 85%）になった。

課題として、ICT 機器を活用した学習の様々な場面で、生徒が主体となり、各種アプリやソフトを目的に応じて選択・活用して問題解決を図る「主体的な活用」の力をさらに高めていく必要がある。



論 文

地域の学校として魅力ある学校づくりの実践 ～荻伏地区を支える人々の参画による主体的な取組の推進～

浦河町立荻伏中学校 中 西 一 繁

1 はじめに

本校は、日高管内の新ひだか町三石地区と浦河町中心部との中間に位置し、昭和22年5月に開校式が行われて以来、今日まで数々の歴史を経て伝統と誇りを継承するとともに、多様な教育課題に対する意図的・計画的な教育活動に取り組んでいる。令和6年度の重点目標「自分をつくり、未来を創る『自立』と『共生』を目指す生徒の育成」を掲げ、生徒・保護者・地域との協働を柱に絆を深め、地域とともにある学校づくりに努めている。荻伏地区では、主体的な自治会等の取組を通じた住民同士のつながりもあり、今年度、コロナ禍を経て各種行事の見直しを行いながら復活させ、中学校区の児童生徒や保護者も積極的に参加する様子が見られるようになった。

2 浦河町学校運営協議会「荻伏中学校区」の取組

令和4年度の熟議において、かつての地震で浸水被害を経験した地域への危機管理意識を高めるという課題解決を図るため、学校と地域が一体となった「避難訓練」を実施した。

令和5年度からは、防災に係る取組に加え、地域の子供たちに「故郷を大切にすることを育むために何ができるか」を視点として熟議を重ねた。その結果、具体的な取組を推進する「地域部会」を発足させ、避難訓練だけではなく、防災学習の充実を図る「防災部会」との二つの部会を構成する体制となった。

(1) スムーズな学校と地域との連携を目指した熟議

災害時、学校での避難所運営を円滑に行うためには、日頃からの「学校と地域の関わり」をいかに意図的・計画的に創出するかが課題である。

このため、学校における地域人材による教育活動のニーズ、地域活性化における自治会等の活動充実、コロナ禍後の地域行事に対する見直し等を視点として、「学校運営協議会として何ができるか」「子供たちにどのような力を身に付けるのか」についての熟議を通じ、委員相互の「地域に対する思いの共有化」が図られた。

(2) 防災に係る行政機関との協働体制確立

「防災部会」での熟議において、町役場等の関係機関と連携して毎年実施している「避難訓練」と「防災教室」を見直し、それぞれの意義を「児童生徒、教職員、地域住民に対して防災時の実践的行動力を身に付ける」こととして位置づけ、内容の充実を目指した。高台避難訓練では、対象とした中学校区の児童が避難する様子を学校

運営協議会委員、町役場職員が見守る中、避難開始から約20分で全員の避難が完了することができた。これまで、学校関係者のみの訓練となっていたが、避難先への誘導、避難完了まで地域住民が見守るという体制をつくったことは初めてのことであり、課題も見出すことができたことから、その意義は大きいといえる。

(3) 危機管理意識を高めるための教育資源活用

防災教室では、中学校区の児童生徒、地域住民らがグループに分かれ、協力しながら防災テントとダンボールベッドの組み立て方などの災害時の避難所運営について学ぶ時間を設定した。この他、地域住民の代表者を講師として招き、「地殻変動の実際と過去の津波災害」をテーマに講演を実施した。講師は、漁業従事者として海底の地形変化を見ている長年の経験をもとに、いつ起きるかわからない地震に対し常に備えておくことの必要性について参加者に訴えた。さらに、「防災への未然防止の取組」と「災害発生後の共助の動き」に向け、日頃からの取組を通じて学校と地域がつながる大切さについて、直接、児童生徒と地域住民に語る貴重な機会となった。

(4) 教育活動の充実に向けた支援への広がり

本校生徒を対象に、キャリア教育の一環として荻伏地区に在住する職業人に日々の活動ややりがい、苦勞の他、地域への思いを聴く場「地域『荻伏』を語ろう会」を開催した。講師は、学校運営協議会が選出し、当日は委員も生徒と一緒に参加する計画とした。授業では、現在の職業を選択した理由等について、青少年期での人との出会いや中学校生活が大きく影響した経験を講師から聴くとともに、ワークショップを通じた生徒から地域住民に対するアウトプットの機会を設定した。生徒にとっては、進路実現を目指すうえで現在の中学校生活を振り返り、新たに現実の課題に直面し解決に向かう機会の創出となっていた。

3 終わりに

一連の取組は着実に成果を上げており、目指す子供像に向けた各種の実践も高い評価を得ていることが、学校評価の結果にもつながっている。

学校運営協議会の取組推進が、荻伏地区全体の子供たちの学びや成長を支えるとともに、地域住民にとって活性化に欠かせないものとなるよう、双方にとって充実感を得られる活動を展開し、住民と学校がかけがえのないパートナーとしてつながる体制の構築に努めたい。

論 文

地域人材を生かした自由進度学習への取組 ～小学校との連携を目指した総合的な学習の時間の編成～

根室市立柏陵中学校 増 田 慎 一

1 はじめに

根室市では学校教育の目指すところとして、「根室人としての誇りと愛郷心を育てる」、「ふるさとキャリア教育の充実」、「自分自身で学び方を選び取りワクワクしながら学ぶ」等を掲げている。

学校区の根室市立北斗小学校では、昨年度から単元内自由進度学習が開始された。また、令和11年度には校舎一体型の義務教育学校になる予定であることから、単元内自由進度学習の可能性を模索するとともに、より強い連携を図るために総合的な学習の時間のカリキュラムを見直すことにした。

2 総合的な学習の時間のカリキュラム見直し

本校では、小学校で培った力を継続させるために単元内自由進度学習の取組として、SDGsの各項目に関する探究活動や道東という環境を生かして北方領土問題から世界平和の実現を願う子供を育成したいという考えをもっている。

毎年「青少年の主張」で北方領土を取り上げる生徒が一定数いる。しかし、知識はあるが主体的に取り組んだ経験が少なく、自身の主張を展開するための実感を伴ったメッセージに乏しくなりがちである。そこで、元島民の方が在住するという利点を生かし、自分発信型の学習活動をつくりあげていくことを試みた。これまで資料館等で説明を受ける機会はあったが、自分の関心に応じて、より主体的に関われるカリキュラムの模索である。

【取組の特徴】

- ・双方向型の講演スタイルにする（を心がける）。
- ・個人や少人数のグループで活動する。
- ・様々な年代の方と交流する機会を設ける。（今年度は元島民、小学生、高校生、大学生）
- ・同世代の中学生や小学生に広めていくために必要なことを考えて資料や教具を作成する。
- ・小学生に伝え、広げる場をつくる。

3 今年度の具体的な取組

(1)「北方領土ラボ」（8月中旬、内閣府企画）

北方領土に関心をもつ大学生が考案した北方領土すごろく「ほくろく」を用いて、中学生目線で改良点などを大学生と意見交流する。

(2)元島民との交流（9月中旬、千島歯舞諸島住居者連盟根室支部）

生徒7名前後のグループに元島民の方を交えて少人数で交流する場を設定した。当時の生活の様子から始まり、

若手に期待することやどのような大人になってほしいかなど中学生にかける想いを知ることができた。



(3)「子どもの意見反映推進事業」（10月上旬、北海道庁主催）



「北方領土について、どのような講話や情報であれば関心をもってもらえるか」をテーマに生徒同士で意見交換を行った。

(4)校区の小学5年生へ「語りべ」として交流（11月下旬）

- ・北方領土すごろく「ほくろく」に自分たちの視点で改良を加えた。止まったマス目に応じて小ゲームをするなど、自分たちでアレンジして小学生と交流した。
- ・元島民の方々から聞いた話をクイズ形式にして、当時の生活の様子等を小学生に広めた。
- ・関心をもってもらえるように、ネット上からアニメ等を探し出して鑑賞したり、北方領土を題材にしたカルタを作ったりして、中学生ならではの発想を生かして小学生と交流した。

(5)北方領土返還次世代プロジェクト（12月上旬、北海道根室高等学校 高校生企画・運営）代表生徒8名参加

4 終わりに

生徒にとって、北方領土問題は「身近だが難しいこと」という感覚が少なからずあると思うが、元島民の方と1対1に近い形で対話できたことは大きな意識変化につながった。そこから、同世代が興味をもつためにはどうすべきか考え、実際に小学生に伝えるという準備を通して、生き生きとした活動になっていた。まだ自由進度学習にはほど遠いが、得た知識を生かすために自ら方法を考え、教材を作り、行動した経験には大きな意味がある。生徒の中には、地元高校の「北方領土研究会」に入りたいという者や、主張発表文を書くため原稿用紙を自主的にもらいに来る生徒も現れている。

今年度はタイミング良く、内閣府や道教委からの企画が舞い込んだが、それがなくても3年間を通じて段階的につながるカリキュラムを完成させていきたい。



「やってみせ 言って聞かせて させてみて
誉めてやらねば 人は動かじ」

ぶれない信念を持ち続けながら、戦場に散った山本五十六の功績は知らずとも、この名言を見聞きしたことがあるという人は多いのではないだろうか。

かつて私は、この名言を念頭に置き、授業や部活動指導等に臨んだが、見本をみせて、さらに噛み砕いて説明したからといって、子供がそのとおりにできることは滅多になかった。そのため、できないことを頭ごなしに叱るのではなく、一つでもできたところを見つけ、褒めようと意識しているつもりであったが、思いとは裏腹に、なかなか実践できなかった。「嗚呼、今日も叱ってばかりいたなあ」と、自分の寛容さと忍耐の無さを悔い、落ち込むことばかりであった。

実は、この名言には続きがある。

「話し合い 耳を傾け 承認し
任せてやらねば 人は育たず」
「やっている 姿を感謝で見守って
信頼せねば 人は実らず」

人材育成、改めて山本五十六に学ぶ

帯広市立清川中学校 小 野 稔 之

今まであまり気に留めてこなかったこの続きの部分だが、校長という立場になり、教員育成指標を基に人材育成を図る今、琴線に触れる何とも奥深い言葉である。以来、「褒める、聴く、任せる、感謝する、信じる」を、常に自分に言い聞かせ、教職員や保護者らと関わっているつもりである。

一方、「よくやった」「偉い」とむやみやたらに相手を称賛するだけが褒めることではないと心得る。褒めることは、すなわち相手を認めることであり、「それでいい」「間違っていない」「きちんとできている」ということを、しっかりと相手に伝えることを意識している。自分のしたことが認められ、これでいい、間違っていないと確信をもてたのなら、人は自尊心が満たされ、自信をもって次のステップに踏み出せると考える。

人を教育し、成長させるためには、教える相手への尊重、双方の信頼関係が重要であり、それらを疎かにすれば、「やらされた感」しか残らないのかもしれない。

そんなことを思いながら、人材育成に挑む日々である。



「ダグラス・アダムスの法則」

から考える

鶴居村立幌呂中学校 秋 山 豊

イギリスのSF作家ダグラス・アダムスが示した考え方を「ダグラス・アダムスの法則」というそうだ。

「人は自分が生まれた時に既に存在していたテクノロジー（もの）は、自然な世界の一部と感じる。15歳から35歳の間に発明されたテクノロジー（もの）は新しくエキサイティングなものと感じられる。35歳以降になって発明されたテクノロジー（もの）は自然に反するものと感じられる。」

現在53歳の私も、この法則を自分に当てはめてみた。実際の発明時期とはずれるが、その「もの」の存在がごく身近になった時期を基準としてみる。まずはテレビ。生まれた時から家庭にあり、今も身近にあるテレビはまさに生活の一部である。携帯電話はどうか。自分が初めて携帯電話をもったのは28歳の時。こんなに便利なものがあるのかと興奮（エキサイティング）したような気もするが、少なくともワクワクして色々な機能を試して喜んでいて覚えている。スマートフォンは現在多くの人が当たり前のように使っているが、自分が初めてスマホなるものの実物を見たのは36歳の時だ。新しもの好きな同僚がいち早く手に入れ、スマホがいかに便利かを喜々として教えてくれた。結

局自分がスマホをもつようになるのはこの出会いの7年後、43歳の時で前述の法則に当てはめると、43歳で手にしたスマホは「自然に反するものと感じられる」はずだが、正直なところそんな実感もない。なぜか。自分が新しいテクノロジーに見事に順応したのかという決してそうではない。答えはきっとこうだ。「生活や仕事上使わざるを得なくなったから」だ。

思えば、文部科学大臣によるGIGAスクール構想に関するメッセージが出されたのが2019年。コロナ禍により一人一台端末の導入が前倒しになったことで、あっという間に学校現場にICT機器が整備された。学校におけるICT機器も、私にとってのスマホのように「使わざるを得なくなった」とも言える。それでも今年の全国学力・学習状況調査の質問調査ではICTを使っていると回答した北海道の児童・生徒の割合は全国平均を上回ったとの結果が示された。始めは「使わざるを得なかった」ICTはその利便性が証明・実感されるのと比例して学校に欠かせないものになった。今日の社会は加速度的に変化しており「ダグラス・アダムスの法則」を超える対応力や柔軟性が求められているのではないか。

後 期 情 報

北海道中学校長会 事務局長 吉 本 将 樹

○今年度の活動を振り返って

北海道中学校長会は、校長としての主体性と指導性を発揮しながら、河村会長による「新たな時代へ 思いを一つに 堅実に歩む 道中」をキャッチフレーズに、全道 20 地区の全会員相互の連携のもと、全道の中学校が抱える諸課題の解決に堅実に努め、新たな中学校教育の創造を目指し、道民の負託に応えてまいりました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の位置付けが五類へと移行されて2年目となり、各学校においては、国が進める GIGA スクール構想の着実な推進と誰一人取り残すことなく、一人一人に個別最適な学びや協働的な学びの実現等を進めることが、さらに求められています。そのような中、道教委・道小をはじめとする関係機関との緊密な連携と、地区校長会との協働や情報共有を大切にし、新しい時代の学校教育「令和の日本型学校教育」の構築と、本道の中学校教育の振興を図ってまいりました。

以下にお示しする内容はその一部です。

- ・文教施策・予算要望に関する要望書の送付
- ・道教委との意見交換会・各課懇談会の実施
- ・道小とともに道教委との連絡会議の開催
- ・地区別教育経営研究会への参加(通常開催 17 地区、Web開催 1 地区、一部Web開催1地区)



- ・会同による理事研修会等の開催
- ・第 65 回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会の開催
- ・道教委の各種施策への意見・要望の集約

○第 65 回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会の開催

9月 27 日、28 日に開催した第 65 回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会は、320 人を超える参加者が集まり、昨年度に引き続き会同形式での開催となりました。

十勝小・中学校長会及び帯広市校長会の皆様には、きめ細かい準備と心温まる運営をしていただき、心より感謝申し上げます。今大会の成果が、来年度の第 76 回全日本中学校長会研究協議会香川大会、そして、第 66 回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会に引き継がれることを願っております。



○来年度の事業について

新たな教育振興基本計画が閣議決定され、大きな教育改革が進む中、部活動の地域展開、学校における働き方改革への取組等、課題は山積しておりますが、「子供を主語」とした教育活動を根底にし、本道の中学校教育の更なる振興に努めてまいりますので、今後とも御指導いただきますとともに、御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

来年度の事業計画は、2月に開催される第5回理事研修会を経て、4月の総会で決定となります。

受賞おめでとうございます (道中関係分)

☆令和 6 年度文部科学大臣教育者表彰

森田 聖吾 校長 (北海道中学校長会前会長 旭川市立忠和中校長)

☆令和 6 年度北海道教育功労者表彰

河村 克也 会長 (北海道中学校長会会長 岩見沢市立東光中校長)

道中事務局日誌

2023. 10. 1～12. 28

月	日	曜	業 務 内 容	時刻	場 所
10	1	火	第3回五役研修会 Web（五役・各部副部長・専任職員）	10:30	各学校、事務所
			日本教育公務員弘済会教育研究論文審査委員会（河村・中井）	14:00	ホテルライフォート札幌
			地区別教育経営研究会【石狩地区】（吉本・前田・田中(道小)）	15:00	石狩教育センター
	2	水	全日中岩手大会提案リハーサル Web（五役・研修部[部長・副部長・幹事・理事・専任職員]	10:00	各学校、事務所
	3	木	地区別教育経営研究会【オホーツク地区】（寺嶋・稲上・高原(道小)）	13:00	北見市端野公民館
	4	金	地区別教育経営研究会【檜山地区】（宮田・丹野・里館(道小)）	9:30	厚沢部町民交流センター
	8	火	第6回事務局研修会（五役・筆頭副会長・幹事・専任職員）	10:30	ホテルライフォート札幌
	9	水	地区別教育経営研究会【札幌中地区】（吉本・中井）	13:00	ホテルライフォート札幌
	11	金	第6回小中合同研修会 Web（五役）	10:00	各校
	16	水	全日中常任理事会（河村），理事会（吉本・三浦・能戸），分科会運営委員会（坂東・田谷・辻並・西山），歓迎レセプション	13:00	メトロポリタン盛岡 NEW WING
			地区別教育経営研究会【札幌小地区】（末原(道小)）	13:00	ホテルライフォート札幌
	17	木	第75回全日中研究協議会岩手大会【開会式・文部科学省説明・研究協議・分科会】（北海道参加者68名）	9:30	トーサイクラシックホール岩手、岩手教育会館他
			第3回北海道環境委教育等推進懇談会 Web（高橋泰）	10:00	自校
	18	金	第75回全日中研究協議会岩手大会【アトラクション・全体会・記念講演・閉会式】（北海道参加者68名）	9:20	トーサイクラシックホール岩手
	19	土	第71回日本PTA北海道ブロック大会 石狩管内・千歳大会 情報交換会（河村・寺嶋）	18:00	ANA クラウンプラザホテル 千歳
	20	日	第71回日本PTA北海道ブロック大会 石狩管内・千歳大会 全体会（河村・寺嶋）	9:30	北ガス文化ホール
	21	月	令和6年度第1回学校における働き方改革促進会議（河村）	14:00	道庁別館
	22	火	北海道部活動関係者会議 Web（坂本）	13:00	自校
	24	木	北海道いじめ問題対策連絡協議会（坂本）	9:30	かでの2・7
	25	金	道中研十勝帯広大会 開催地関係機関 終了報告とお礼挨拶（河村・高橋正）	11:30	十勝教育局、池田町教育委員会、帯広市教育委員会
			北海道中体連第2回常任理事会（坂本）	13:30	第二水産ビル
	26	土	青少年科学技術振興作品展（前田）	9:00	豊平小学校
	29	火	SNSを活用した相談事業連絡協議会（小泉）	10:00	第二水産ビル
			第4回五役研修会	10:30	道中事務所
11	1	金	地区別教育経営研究会【空知地区】（河村・小泉・高原(道小)）	14:30	岩見沢まなみーる
			「北海道教育の日」第17回制定記念行事（高橋正）	15:00	ホテル ライフォート札幌
			北海道中体連第2回理事会 We b（坂本）	13:30	自校
	5	火	地区別教育経営研究会【旭川小地区】（末原・佐藤(道小)）	14:30	上川教育研修センター
	6	水	「第52回中学生作文コンクール」最終審査会（中井）	14:00	北海道放送
	8	金	令和6年度青少年育成運動活性化研究協議会（小泉）	10:30	かでの2・7
			運営委員交流会（五役・運営委員・専任職員）	10:30	事務所
			第4回理事研修会（五役・副会長・理事・運営委員・幹事・専任職員）	13:45	道特会館
			道中研全体研修会「引き継ぎ会」（五役・十勝帯広大会実行委員会・胆振室蘭大会準備委員会・研修部・専任職員）	15:30	道特会館

月	日	曜	業 務 内 容	時刻	場 所
11	12	火	第 7 回小中合同研修会（五役）	10:00	道小事務所
			五役研修会	12:00	道中事務所
			北海道教育フォーラム（11/29）パネリスト打合せ（河村）	15:00	かでの 2・7
	13	水	道中第 1 ブロック研修会（河村）	16:00	小樽市内
	15	金	全日中令和 6 年度中間監査（柴田）	13:00	全日中会館
			全日中第 2 回副会長会（河村）	14:30	全日中会館
			道中第 4 ブロック研修会（山田）	16:00	岩見沢市内
	19	火	令和 6 年度第 1 回北方領土学習資料編集委員会（北村）	13:30	札幌ガーデンパレス
	24	日	北海道学校保健会旭川大会（三浦）	9:00	旭川市大雪クリスタルホール
12	25	月	日本教育公務員弘済会北海道支部 第 2 回幹事会（吉本）	17:30	ホテルライフオート札幌
	29	金	北海道教育振興会創立 50 周年記念北海道教育フォーラム（河村・吉本・三浦・高橋正・山田）	14:00	ホテルライフオート札幌
	1	日	北海道青少年科学技術振興作品展表彰式（三浦）	13:00	札幌市青少年科学館
12	6	金	第 7 回事務局研修会（五役・幹事・専任職員）	15:00	ホテルライフオート札幌
	7	土	道 P 役員会・正副委員会・理事会・情報交換会(寺嶋)	10:00	ポールスター札幌
	10	火	北海道教育実践表彰選考会議（坂本）	14:00	道庁別館
			令和 6 年度大学・民間企業と連携した教師人材の確保強化推進事業「北海道教師人材確保会議」（吉本）	13:00	第二水産ビル
	20	金	特別免許状授与事務第 2 回審査に係る特別免許状検定協議会 Web（山田）	11:00	自校
	23	月	小中学校免許状併有のための認定講習検討会議 Web（山田）	13:00	自校
			令和 6 年度北海道・札幌市公立学校教員採用に関する協議会（吉本）	14:00	第二水産ビル
	24	火	教職員互助会第 3 回理事会（山田）	10:30	損保ジャパン札幌ビル

北海道中学校長会

発行者 会長 河村 克也

編集者

道中情報部

事務局 札幌市中央区北 1 条西 3 丁目敷島プラザビル 4 F TEL011-251-1344 FAX011-251-1302 <http://www.dochu-kochokai.jp>